

續日本紀の宣命などは、先づ論が無いとしても、史書と法制書と地誌との全部を包括するとすると、範圍が廣まると同時に、明確な限界がつかなくなる。古代の文學といふことに限ると、稍々明確になるやうに考へる仕方もあるけれども、これも文學といふ語の理解如何によつて變つて來る。まして古代といふ時代を意識に上せて見ると、或は奈良時代以前を考へ、或は平安時代までを考へ、或は鎌倉室町時代をも考へるから、その了解する典籍の範圍は、お話にならぬ程の隔りがある。

史書や法制書をも取扱ふと話が複雑になるから、暫く文學書に限つて見ることにする。萬葉集や懷風藻を古典といふに異存は無いとしても、日本靈異記や凌雲新集は如何に、伊勢物語や竹取物語はどうか、源氏物語や枕草子は加へるか、古今集や後撰集、乃至拾遺集は數へるか。其の限界はどんなに理窟を附けて見たところで確定せられるものでない。のみならず平家物語や太平記などまでも古典といふに不當でなく、宴曲や謠曲に於いても、新古今集や新葉集に於いても、近古時代に雄視する古典文學であるに異議は無いわけである。

最近の國文學界では、明治時代の文學を研究する學徒の現はれるもの頗る多く、色々の方面から學的研究が加へられるやうになつたが、それにつれて明治時代の文學を古典と呼ぶことも

行はれて來たのである。これは一種の文飾として用ひられる場合もあり、警句として提出せられる時もあり、洒落れた言ひ方として使はれることもあるけれども、又學的な意味からも一理は有る稱呼である。新と古とは結局比較の語であるから、新時代の特相に比較して、新時代以前の特相を多量に具へた文學を古典といふに差支なしとすれば、明治以後の文學に始めて近代的な特相が現はれたと見る立場から、明治までの文學に此の近代的特相が未だ現はれてゐないから、之を古典として明治時代といふ過去の世を研究するのも、強ち奇矯とは言はれない。但し此の見方からすると、大正時代の文學も昭和時代の文學も、やがては古典と呼ばねばならなくなることを豫想しなければならぬ。時代的特相の有無は作品個々に就いて言はるべき場合が多くて、古代といひ近代といふ區別は年次によつて劃然と分たるべきものでないからである。

蓋し古典文學といふ言葉の中には、作者たる古代人の精神生活の具現として、換言すれば我等現代人の祖先たる人々の精神生活の記録として、之を尊重し愛護し回顧し典據とする心持が有力に動いてゐると共に、他の一方に於いて文學表現の様式論的種別の上に立つ一部類を指す名稱と考へる心持が常に附いて回るのである。前者に在りてはおのづから近古よりも中古、中古よりも上古の文學を以てその資格に適するものと認める傾向があり、後者にありては上古に

も中世にも又近代にも、苟も一様式の完成を遂げた時には、いつでも存在し得ると見るようになる。明治時代の文學を古典といふ言葉で指す時などは、大略後者の意味合ひからであり、世の文學を古典と呼ぶ時には、後者の意味を含むと共に前者の意味をも多分に含み、上古文學に限つて之を古典とする時には、主として前者の意味から之を稱するのである。

二

様式論的種別に立つ古典の意義を説くことは暫く措くとして、専ら古代人の精神生活の具體的表現としての古典の意義を考へることにすると、論議の範圍は著しく限定せられて、一見極めて明瞭なものやうに思へる。然しながらそれは我等の精神生活の最初の様相、祖先たる人の精神生活の原始の様相、まだ展開伸張を始めないうぶな様相を見るべきものが盛られてゐるといふだけで、これが我が國の精神生活の眞の様相であり、全き様相であるとすべきものを示してゐるとは言へない。従つてそれらの文獻を古典と呼ぶことは、唯我が國の精神生活の原始様相を具現するといふ意味からだけであらねばならぬ。

古代文學はおのづからの現象として作者及び作品に乏しい。のみならず歲月の淘汰を経て漸

次に残り少くなる。三千年後の今日に残された現存文獻は、此の意味に於いて甚だ貴重な寶物であつて、原始精神生活を探究するよりどころとして、外に類を求めることの出来ない尊い典籍である。古代文學を指して古典と呼ぶことは、いづれの方面からも異議の無いところで、我が國民の精神生活を探究する者の必ず取扱はねばならぬ文獻であることに、些しの疑も無いのである。然しながら我が國民の精神生活はこれらの文獻にだけ具現してゐると思つたり、之を探究する資料はこれらの文獻の外に無いと考へたりしては、却つて事の眞實を誤るので、古典の尊重すべき所以は、國民の精神生活の資料とする限りに於いては、唯其の原始の様相を示すところに在るだけだといふことを明確に認識しなければならぬ。精神生活の全貌から見れば、ほんの一部（よしそれは最も重要な一部であるにしても）に過ぎないことを承認して、始めて事の眞實に觸れ得るのである。

精神生活の内容はその全貌を一時に發揮し盡すものでなく、長い時日の中に、機に觸れ縁に因つて徐々にその風豊を現はすものである。一個の人間にしても其の幼少時に於いて既に現はれるものは、ほんの一部分に過ぎないので、大部分は海のものとも山のものとも知れぬ未分未生の状態に在る。三つ兒の魂は六十歳まで變らぬもので、それは人の一生涯の精神生活の中、

最も重要な一部を形作る素質であることは、言ふまでもないけれども、それだけが其の當人の精神展開の全貌でないことも、亦論を俟たぬことである。其の人の魂はむしろ未分未生の混沌状態に在るものの中に、より多くの伏能的展開性を藏してゐるかも知れない。その伏能的素質が年齢の進むにつれ、内面的並に外面的の各般の刺戟により、徐々に其の面目を現はして來るのが、むしろ大多数の場合に見られる現象である。之を國民又は民族の上に見て、原始の時代から現代に至るまでの歴史を辿ると、正に一個人に於ける幼少時から青年壯年に至るまでの歴史に該當するものがあらう。

我が國の精神史を探ぐる者は、何人も神話傳説の古から、各時代の人々によつて創作せられた文學作品を研究して、こゝに國民の精神生活の種々相を髣髴しようとする。而してその著しいものを名目して、或は素朴といひ、或はまことと稱し、あはれ、幽玄、さび、枯淡、をかしみ等とも言つて、我が精神生活の面目を展開的に見ようとするのである。これらは決して同一時に發現したのでは無くして、長い歴史の間に序次を追うて形を成し來つたのである。故に之を探究する資料となつた各時代の典籍は、皆同等の價値を以て取扱はれるので、決して原始時代のもののみが貴重であるといふわけは無い。古事記を貴ぶと同時に源氏物語をも貴び、萬葉

集を重んずると共に新古今集をも重んじなければならぬ。のみならず平家物語にも、謡曲にも、狂言にも、俳諧連歌にも、夫々の重要性が具はつてゐるので、決して上代に現はれたものだけが特別の地位を占めるわけではない。

此の種の典籍を呼ぶに等しく古典の名目を以てするのは、誠に妥當な取扱であつて、我が國の精神生活の様相を具現する文學を古典文學と稱するに何等支障はないのである。唯此の名目に含まれてゐる古といふ概念に就いては、必ずしも明確になつてゐるとは言へない。同等の價値を以て相並ぶ古今の典籍をば、唯その出現の年代によつて區劃しようとする、其の境界は常に決定の困難に逢着する。源氏物語を古典の中に數へるなら謡曲も之に數へて差支無ささうであるし、枕草子を古典と言ひ得るなら徒然草をもさう呼んで支障を起さないのであるが、それでは芭蕉、蕪村の文學をも同じく古典と言はねばならなくなつて來るのである。

三

古典が我が國民の精神生活の様相を具現する重要な文獻であることは、全面的に承認せられることであるが、特別に古代の文獻に限つて、其の後のものと區別して考察に上せられること

のあるのは、其の具現するところの國民精神生活が、我等の祖先のそれであり、國民最初のそれであり、精神生活の夜明けの様相であるからでもあるが、それよりも國民精神生活の最も純粋な様相が見られるといふ所に重點が置かれる場合が多い。こゝに純粹といふのは、外物の夾雜が無いといふ義で、後の世の文獻には外國交通の事態から來る外來精神生活の混在があると觀察せられるのに對し、真正に國民的なものが見られるといふのである。

これには二様の見解があつて、全くちがつた立場から原始文獻を取扱つてゐる。其の一は、外國交通以後、隋唐交通以後に制作せられた文獻には、悉く外來の影響があり、或は外國の模倣があつて、純な國民生活の様相を示してゐないといふのであつて、思想にも趣味にも言語にも藝術にも、すべて佛教儒教の影響があり、三韓、震旦、天竺の傳來があつて、國民本來の面目を失つてゐると觀るのである。江戸時代の國學者系統の人々の研究には、此の流の立場を取るものが多く、現今といへども、古代生活の純粹無雜な様相を以て國民生活の眞相であるとなす認識が、少からず世に行はれてゐるのである。其の二は、海外交通以後の文學は悉く最高文化圏に在る少數貴族階級の精神生活を具現するに過ぎぬもので、佛教又は漢文學の直接影響によつて出來た文學などは、同じく少數貴族社會の知識的遊戯に屬するもので、いづれも國民多

數の純な氣持を示してゐるものでないと觀るのである。此の考へ方に従ふと、飛鳥藤原奈良時代の文學は、既に貴族文學又は宮廷文學に屬するので、中古平安時代のもものは其の中堅をなし、鎌倉室町の武士時代の文學は、その餘光を拜するものとなる。而して純粹に全國民の文學といふべきものは、最古外來文化の未だ影響を與へてゐない時代の民族文學と、近世になつて始めて擡頭した平民の文學との二者だけとなるのである。此の觀方は明治時代に起つた平民主義者乃至大正初年に現はれた民衆思潮に溶する研究家の間に行はれ、現今に於いても此の立場を取る觀方は決して少くは無い。

右の二者はその系統が全くちがひ、考へ方もその根柢を異にするのであるが、古代文學を以て純な國民精神の具現だとする點だけが一致してゐる。然しながら國民の精神生活の純粹性といふものは、外國交通以後乃至外來文化移入後は全く失はれてしまふものか、又は少數貴族の制作である文學や知識階級の制作である文學は、少數者の制作であるといふことの爲に、國民の精神生活を具現するものであり得ないかといふ段になると、輕々に論じ去ることの出來ぬ幾多の問題がある。

第一に國民の精神生活の内容をなす個々の事象は、決して未開化未發展の古代に於いて悉く

現はれ盡すものでなく、長い歴史の間に多くの機縁に觸接して、その都度徐々に其の面貌を露はすものである。而して其の機縁となる事柄は或は外來文物であり、或は國民自身の生長であり、或は少數文化人の先驅的進展であり、或は風土環境の變化展開であり、その類多様多種で枚擧し得ないほどであるが、いづれにしてもこれに觸接して發揮せられる國民の精神生活の新しい面目は、必ずしも模倣でなく、附焼刃でなく、又少數にだけしか通用しないものではない。やはり國民精神生活の純なるものの一であり、我々の血液の中に流れてゐる祖先からの傳統の一つであり、渾沌の原始形體の中に葦の芽のやうに含有せられてゐたものの展開の一つである。その發現の年代に遅速があり、一千年二千年の隔たりがあつても、發現その事は決して偶然でもなく、無いものが添加附著せらるるでもなく、借りものの衣裳が著せられたのでもないのである。かやうな新しい發現を悉く外來移入となし、純粹に非ずとなすのは、國民の精神生活といふものの展開性を忘れ去つた見解である。

第二に上代及び中世に於ける少數貴族といふものは、近代及び現代に於ける少數貴族といふものとその類を異にしてゐて、國民の全體の中の文化的先驅者であり、精神生活の上の選手であり、民族大衆の統率者であつた。決して國民大衆から無縁の高踏世界に遊離してゐる無力な

存在ではない。蓋し精神生活の立場から言へば、原始の國民大衆はまだ本當の精神生活を生活してはゐなかつた。文獻の形に記録せられ、文學の形に制作せられて今日に傳へられる古代國民の精神生活なるものは、やはり少數先覺者のそれであり、少數選手のそれであつたのである。上代の文學を指して國民全般の文學となし、中古平安時代の文學を指して少數貴族の文學となし、前者を國民全體の所産として後者と區別しようとする研究者は、此の真相に透徹しないものである。されば少數貴族といふ言葉を現代に於ける社會事情の下に用ひられるのと同じの意味に用ひることは、既に混同誤解の本になるので、古代の少數指導者階級は、少數であつても、堂々たる國民の代表であり、純粹なる國民精神生活を生活してゐるのである。そして一般大衆は却つてまだ文獻の形に現はれ文學の形に作られるほどの精神生活をしてゐなかつたのである。此の事は近世の文學の上に町人文學を取扱ふ時にも、相似の形で現はれる。それは江戸時代の町人文學を一般大衆の文學と理解し、平民文學といふやうな言葉を用ひて貴族文學と對立に考へ、甚しきは現代社會に存する無産者といふ概念を之に適用して、無産者の文學と見做すやうな場合に於いてである。江戸時代の町人文學は、武士文學に對する町人階級の文學であつて、治者であり有識者である武士に對し、被治者であり商賈である町人が金力富力によつ

て擡頭し來つて、こゝに精神生活の仲間入りをした時に制作せられた文學である。決して平民全般の文學でもなければ、無産者の文學でもない。當時平民の中に大部分を占める農民、其の他各種の無産労働者等は、數に於いて壓倒的多數を占めるに係はらず、未だ文學の制作者にもならず、鑑賞者にもならず、又其の題材になるやうな生活をもしてゐなかつた。町人文學に現はれるものは平民一般の生活でなくして、資本家たる町人だけの精神生活である。

第三に外來の影響によつて現はれ、外物の模倣によつて出來た文學には、國民の精神生活の純粹な様相が見えぬといふのが常識であるけれども、其の移入せられたものを採用するか否かを決する者は國民の精神であり、其れを模倣するか否かを定めるものも國民の精神である。三韓、震旦、天竺の文物は、決して我が國に移入したものでなく、我が國民の採用したものでない。相當高度の文化を持つてゐた國々の事であるから、多種多様の文物を具備してゐて、我が國民の生活に深い接觸をしないで濟んだ部分がある多かつたのであらう。之を受け入れるに方つて取捨選擇を加へたのが即ち我が國に於ける外來文化と稱せられるものである。故に我が國で言ふところの外來文化は、その本國に存する一切の文化ではなくして、その中から我が國民精神による鑑別取捨を経たものである。此の事は彼れの長を取りて我が短を補ふと

いふ事とは、おのづから別種の作用であつて、長短を意識して理智的計畫的に移入を統制する作用を指すのではなく、我が國民精神に適合するものが取られ、適合しないものが捨てられるといふ現象を指すのである。誤つて天竺震旦の文物がすべて鵜呑にせられたと考へてもいけないし、又誤つて移入した文物だけで天竺震旦の文物は盡きてゐると考へてもいけない。而して我が國に採用せられ、又は模倣せられた文物は、往々にして鵜呑にせられたと説かれ、好奇心からの一時的附焼又と解せられることがあるが、それは速断であつて、深い反省を経ない輕浮な想像に過ぎぬ。當該の文物は我が國民の趣味に合致し思考に合流するが故に採用せられ模倣せられたので、その採用といひ模倣といふのも、外面的な一時的のものではなくして、深い内面的結合のある必然性のものである。故にこれら文物は直接我が祖先の精神生活の中の新しい展開と見て差支ないものである。但しこれを國民的ならざる外來文物を攝取して國民的なる文物と融合するのだと解してはならぬ。國民的でないものを國民的なものに渾融するといふ作用は、おのづから別種の事象に屬する。

國民精神生活の純粹と不純粹とは、たやすく分別せられるものでないことは、右に述べる通りである。従つて上古の文物だけが純粹に國民的であつて、他は皆すべて外國分子を混入するが故に不純であると説くのが誤りであると同時に、中古以後の文學は、特殊地位に在る貴族だけが外國文物にかぶれて制作したものであるが故に、國民的な立場から言へば悉く純粹でないと言ふのも亦誤りである。古典といふ語が若し國民の精神生活を表現する大切な文献を指す言葉であるなら、上代文學の主要なものは勿論、中古文學及び近古文學に屬する物語や日記、和歌や連歌、謠ひ物や劇文學、隨筆や評論文學等の中にも、同様に大切な文献があつて、同じく古典と稱されなければならぬ。のみならず近世に出現した淨瑠璃や俳諧文學、史論や教學論等にも、同様に大切な古典が存在するであらう。聖德太子の精神生活を考へずして國民の眞精神を言ふのが誤りであると同じく、北畠親房の精神生活を知らず頼山陽の精神生活を除外して、國民精神の生粹を解しようとするのも誤りである。柿本人麻呂を仰ぎ見ると共に、和泉式部をも藤原定家をも正視しなければならず、西行法師、宗祇法師をも顧みなければならぬ。まして芭蕉翁を除外しては、國民の精神生活を全的に把握することが出来ないであらう。又古事記の神話傳説を尊重すると同時に、竹取物語や源氏物語が大切にせられねばならず、平家物語も太

平記も同様に古典であらねばならぬ。世阿彌元清の精神生活が我が中世の精神生活の展開ぶりを示すものであると共に、近松篁林子の精神生活も亦、近世に擡頭した國民の新階級の精神生活を示現するものであらねばならぬ。

されば古典と稱すべきものは唯古代の所産なるが故にといふのではなく、又唯過去の所産なるが故にといふのでもない。明治時代の制作をまで加へるにしても、その全部を指すのではなくして、常に皆國民精神の生粹を展開的に表現してゐるといふかどで考量すべきである。

如上の意味に於ける古典は、我が祖先よりこの方、國民の精神生活の全貌を、次々に露呈し來つた貴重な精神的遺産であつて、我々は之を資料として古代國民に接し、中世國民に接し、我が魂の古里に歸省することが出来るのである。我々は之を題材として我が國民といふものの眞骨頭に觸れることが出来るのである。神話傳説の昔からこの方、萬葉集にも源氏物語にも、八代集にも新葉集にも、定家の歌論にも世阿彌の藝道論にも、親房や兼好の思想にも、宗祇や芭蕉の連歌發句にも、悉く國民精神生活の生粹なるものが、次々と展開具現してゐる。此の事は文學以外の材料に就いても同様に言はれ得るのであつて、所論の多岐に互るのを避けてこゝには暫く古典文學だけに就いて述べることにしたのである。(昭一四・八・二二)

日本文學と山水

山水といふ熟語は支那文人の創造で、水は河川、江湖、海洋を含み、山河とか山川とか山澤とか山海とかいふ時は、部分的な意味になり、江山とか湖山とかいふ時も、同様に部分的な意味に用ひるのであるが、山水といふ時は、總括的な意味になつて稍、概念性を帯びて来る。この概念性が擴大すると、「水」が河海江湖そのものだけでなくなり、「山」もそれに伴うて丘嶽や嶺峰そのものだけでなくなり、相結んで「自然」の風物を代表するものとして取扱はれるやうになる。従つて山水は山と水とはなくなつて、自然の風景そのものを表はす語となり、林樹雲霧をも包攝するやうになるのである。

語としては風景の總名に用ひられるが故に、これが文學作品に關して用ひられる場合にも、山水を取扱つた文學といふ時は、自然の風物を取扱つた文學と解し、山水と文學との關係といへば、當該國土の自然とその國の文學との交渉といふ意味に解せられる。「日本文學と山水」といふ課題も、日本の文學と日本の自然との交渉の様相を敘するものと理解すべきであらう。

文學の題材を自然と人生とに大別する時、當該國土によつて、又は時代の推移によつて、其の孰れにか偏傾する状態を示すものである。ギリシヤの昔から、西洋諸國の文學が概して人間の興味に傾き、劇や小説は言ふまでもなく、抒情の詩歌に於いても主として人間生活を取扱つてゐること、及びそれが近代になつて、自然を觀照する詩歌を作るに至つたこと等は、今こゝに説くを要しない。日本文學の場合に就いては、自然と人間とは、相並んで詩歌の題材となるのみならず、物語や小説のやうに人間生活の描寫を主とする文學でも、自然の風光を顧ることを決して忘れることが無いのである。

しかしながら文學者の階層を異にし、地域を異にし、又は時代を異にすると、同じく日本文學と言ひながら、人間生活の臭味の相當濃厚なものもある。江戸時代に現はれた町人の文學などは此の例であつて、特に江戸育ちの文人の制作に此の傾向が強いのである。唯これを總括的に見ると、自然の風光に關心をもつことは、日本文學の一つの特質であつて、それを專一にする作品の部類までも存するのである。のみならず自然と人間との間に對立的な分別を認めず、兩者を等しく我が生活の中に渾融して考へるやうな特異の様相をも示すのである。

* * * * *

日本書紀神代卷の初めに、伊弉諾・伊弉冉二尊の國生みの神話に續いて

次生海、次生川、次生山、次生木祖句句廻馳、次生草祖草野姫亦名野槌

とあり、海、川、山、木、草が各々神として此の國土に生れ出たことを物語つてゐる。木と草とに名前を傳へて、海と川と山とには名前を傳へてゐないが、一書によると、海は少童命、山は山祇の名を負ひ、古事記の傳によると、海は大綿津見神、山は大山津見神と稱へられてゐるのである。

これらの神は皆山や海そのものであつて、之を支配し之に宿る山靈海若の類ではない。自然物そのものであつて、自然物の中に潜在する靈的なものではない。従つて大綿津見神や大山津見神は、唯一柱の神の名でなくして、多くの山、多くの海、幾柱の神に通ずる名である。日本書紀の一書に「生海神等、號少童命、山神等、號山祇」とあつて、一々に等といふ複數接尾辭を附けてあるのを參照すべきである。古事記傳には、大綿津見神や大山津見神を、唯一柱だけの神と理解して説明してあるから、後に他の地域に現はれる同名神があると、該神が一旦鎮まりまして後、其の靈魂が再び化現せられたのであると説かれてゐるのであるが、こゝにはそれを採らない。古事記の神話によれば、出雲國にも大山津見神があり、日向國にも大山津見神があ

り、各、其の國の山岳として現はれる。須佐之男命の大蛇物語に出る足名椎神は大山津見神の子であり、日子番能邇々藝命の日向物語に於ける木花之佐久夜毘賣も亦大山津見神の子であるが、此の二つの大山津見神は同一神でなくして、一柱は出雲の山であり、一柱は日向の山である。従つて出雲の木花知流比賣は、同じく大山津見神の女と生れても、之を日向の木花之佐久夜毘賣の姉神ではないかと疑ふ必要は無いのである。

山川河海は日本神話に於いて各、神として現はれ、天つ神の御子を中心とする國民生活の中に渾融してゐる。従つて自然も亦人生の一部面であつて、而も祖先を同じうする一民族の生活の中に含まれる。されば日本神話には、人生の外に存在する自然といふものが無く、人間と對立する山水といふものが無かつた。

萬葉集の和歌に、不盡山を詠じて、「日の本のやまとの國の鎮めともいます神かも」(卷三)といひ、吉野の山川を歌つて、山祇は花を調ぎ河神は魚を献り、山川相依りて大君に奉仕する(卷一)とよみ、明石や鳴門の急潮を見て「わたつみはくすしきものか」(卷三)と驚くのは、正に上述の傳統に出づるものといふべく、日本文學に見える自然親愛の特質は、その展開の基礎をこ

山水を人生の外に立つものと見、自然を人間の生活と對立するものとなし、人の世が塵俗であるに對して、山水は清雅であると觀察し、其の結果として、塵俗の人生を脱離して清雅な山水に悠遊するといふ詩想を育成したのは、支那文學の輸入せられ崇拜せられてから以後の事である。懷風藻の詩篇は、此の點に於いて正に劃期的な地位に立つ文學である。

「命駕遊山水、長忘冠冕情」とは葛野王の御作であり、「煙霧辭塵俗、山川壯處居」とは隱士黒人の句であるが、此の種の詩情は、懷風藻の詩人に共通の山水觀である。

欲閑居趣、來尋山水幽、浮沈烟雲外、攀翫野花秋、稻葉負霜落、蟬聲逐吹流、祇爲仁智賞、何論朝市遊

物外鷲塵遠、山中幽隱親、笛浦棲丹鳳、琴淵躍錦鱗、

月後楓聲落、風前松響陳、閑仁對山路、獵智賞河津

(大神安麻呂)

(葛井廣成)

「知者樂水仁者樂山」といふのは山水觀の一つの型であつて、支那詩文人の創作にかゝるものであるが、懷風藻の詩篇では、これが模倣襲用といふ外に、特別な展開の新味が感ぜられない。一百二十篇の詩作の貢獻は、むしろ山水の美をしみじみと鑑賞する心情を我が文學者に植ゑつけた點にある。

此の種の心構は本來我が國民に缺けてゐたわけではない。人間生活の圏内に山水を包攝してゐた我が國民は、始めから山水を熱愛し讚美してゐた。唯之を人間と區別して、山水を愛するが故に人間を嫌忌するやうなことをしなかつただけである。日本書紀に景行天皇の御製と傳へられ、古事記に倭建命の御作と傳へてゐる「やまとは國のまほらま、たゞなづく青垣山こもれる大和しうるはし」の感激は、何等支那文學に交渉をもつものでなく、應神天皇紀の「ちばの葛野や」や、雄略天皇紀の「こもりくのはつせの山」や、その他多數の國見の歌も亦これに關りの無い歎賞である。山水愛好の歌は、このまゝに放置してゐても、展開の一路を進むことは疑ひのない趨勢であつた。

唯この國民的な感情に刺戟を與へ、この展開の狀勢に推進力を加へた功績は、之を認めなければならぬ。山水美を鑑賞する心構を植ゑつけたと言つたのは、國民感情に存在しないものを新たに作り上げたといふ意味ではなく、既に有るものを育成して、眼識を高め詩領を廣くするに至らしめたといふ意味である。之を奈良時代の少數貴族の知的遊戯と見なし、國民の多數から遊離したインテリ階級の風流に過ぎぬと見なすのは、すべてを支那文學の模倣と見なすことと共に、當を失するの甚しいものである。

斯うして山水鑑賞の文學は急激に展開し始め、萬葉集の長短歌に山水を敍するものが次第に多くなつた。其の表現の手法に漢詩の技巧を取入れたものが少くなく、特に長歌に用ひた對偶聯對の敍述様式の發達は、支那文學に普通なる駢儷の修辭法の暗示によるところ頗る多いので、山部赤人が「登神岳作歌」に、

……飛鳥の古き都は、山高み河遠白し、春の日は山し見がほし、秋の夜は河しさやけし、朝雲にたづは亂れ、夕霧にかはづはさわぐ……(卷三)

と詠んだ技法など、均齊雅麗を極めてゐるのではあるが、かゝる技巧は、反覆の諧調を愛し古典的な整齊を好む國民本來の趣味に會、合致するところがあつた爲に、忽ちに取入れられ適用せられたに過ぎぬので、山水觀の問題に取つて格別の顧慮を要する事項ではない。取上げて見たいのは、支那文學に強調せられた人間と山水との相反性を、どの程度まで日本文學に包容してゐるかの問題である。

* * * * *

萬葉集の和歌の大部分は、懷風藻の詩篇と時代を同じうするのであるが、山水を人生苦からの逃避境として讚美する氣持を歌つたものは見當らない。神仙境として描寫したものはある

が、歌人達の歌ふ神仙境は、人間から逃避する意味の塵外國ではなくして、却つて人間的な欲望を完全に満たし、長生不老の歡樂を享受し得る世俗國である。或は「雲に飛ぶ藥」を欲し、「ち水」(變若水)を求め、或は「藐姑射の山」を見たく思つたり、「無何有の郷」に心を遊ばせたりしても、皆人生の延長としての自然を目指すので、漢詩に見えるやうに、人間と絶縁せられ世外に超然としてゐる清淨境を期待するのではない。山水に對する態度は、どこまでも崇高なものとして尊み、同類としてなつかしみ、美しいものとして愛好し、人間と共に悲喜するものとして之を親昵したのである。

萬葉集には純客觀の敍景の歌は無い。長歌はいふまでもなく、短歌にあつても、あらはに主觀の語を用ひてゐないだけで、いづれも人間的な情緒を寄せた抒情の歌である。

東の野にかぎろひの立つ見えてかへり見すれば月かたぶきぬ 人麻呂(卷二)
み吉野の象山のまの木ぬれにはこゝだもさわぐ鳥の聲かも 赤人(卷六)

などの短歌は、往々客觀描寫の敍景歌と解せられてゐるけれども、此の類の作は決して山水を繪畫的に描くことを主としたのではない。上掲二者が各、長歌に連作せられた反歌として出てゐるのを見てもわかる通り、或は安騎野行啓のお伴をした時の感傷をこめたものであり、或は

吉野離宮に奉仕した時の衷情を披瀝したものである。されば敍景抒情の區別は、萬葉集に於いては特に必要のあるものでない。取上げたいことは、むしろかうして純客觀の描寫と見られるほどまでに、山水の眞實に觀入することを得た清澄な詩眼の出來て來たといふ事實である。

右のやうな作は、人間世界の對蹠的存在としての自然を觀察し、塵俗の人生から逃込むべき山水を謳歌する程度の文人の至り得る境地ではなく、人間と同様に呼吸する自然を知り、人生と同様に生活する山水を感じる者のみの作り得る詩歌である。卷十柿本人麻呂集の作に見えるあしびき山川の瀬の鳴るなべに弓月が岳に雲たちわたる

などになると、漢詩の「仁山知水」などから學び得べき境地をば、遠く遠く超越してゐるのである。

* * * * *

大伴家持が竹風のかそげき音をしみじみと聞き入つて、「我が宿のいさゝむら竹吹く風の」と、萬葉集卷十九に於ける絶唱をものした態度は、古今集時代及びその以後の歌人の自然に對する態度の先蹤となり、それが展開して新古今集の四季の歌にも及んでゐるのであるが、その間にもおのづから流風のちがつた態度も現はれて來るのである。それは僧侶歌人を主とする隱逸者の

の文學に見えるものである。

隱逸者の山水に對する態度は、即ち鴨長明が方丈記に記せる如く、「世を遁れて山林にまじはる」のである。日野山の奥に跡を隠した長明は、宇治川を眺めて潯陽の江を思ひやり、折々の景物に接して一々之を觀念のたよりとしてゐた。藤波は淨土の紫雲を思はしめ、郭公は死出の山路の同行を契らしめる。ひぐらしを聽いてはうつせみの世を悲しむと觀じ、雪を見ては積り消ゆる罪障に譬へるのである。西行法師の和歌に見える山水の觀方も、大要此の類であるが、しかし方丈記のやうに單純でない。

「花にそむ心はいかで残りけむ捨てはててきと思ふわが身に」と詠んだ西行は、絶對厭世の立場から、山林にまじはることを否定しようとするのであるが、花月に對する愛著だけはどうすることも出來なかつた。世を捨て人を避けて山水に棲遲する隱者型は、かうして西行の一生を支配したのである。而も自然愛の熱烈さは、世の常の隱逸者と比較にならぬものであつて、内部に矛盾相剋の複雑性を藏し、國民的な人生愛（自然をも含む）と佛者的の人生否定との奇しき交錯を見せてゐるが故に、之を長明の生一本にして奥行の淺きに比べると、等しく隱逸者型といつても、二者の間に大きな間隔がある。

徒然草の兼好法師に至つては、更に大きさと深さを増すもので、吉野拾遺の物語に見えるやうに、「よそながら思ひしまゝの山里」を希求して、木曾の庵をさへ捨てて来たところだけを取上げると、普通の隱逸者の型にはまるのであるが、「源氏物語枕草子などにこと古りにたる」自然のうつくしさを、先人の筆の跡を氣にしなから、書きすすんでゐるところは、決して人間苦を脱却する安息所としてあこがれるのではない。「嵇康も山澤に遊び魚鳥を見れば心樂しぶといへり。人遠く水草清き所にさまよひありきたるばかり心なぐさむことはあらじ」といふあたりは、竹林清談の型に過ぎぬやうに見えるけれども、徒然草全篇に漲る生活態度、ものあはれを人の世にも又月花にも共に味ひ盡さうとする態度は、あの七賢人などの及びもつかぬ段ちがひの世界に住むものである。

「世は定めなきこそいみじけれ」と言ひ切つた此の法師は、世の常の厭世者流を驚かしめてゐるのみならず、又「世をそむける山奥の草の庵に、靜かに水石をもてあそびて」それで無常の人生を離脱し得た氣になつて納まつてゐる人々の愚かさを痛烈にきめつけてもゐる。獨り幽篁の裡に坐して、「深林人不知、明月來相照」と吟じた盛唐の詩人は、脱塵の高士にはちがひないけれども、この法師の規模は更に更に博大であつて、尋常隱逸者流の型に嵌まりきらないものである。

此の系統を辿り下ると、遂に芭蕉翁に逢著することになる。「造化に従ひて四時を友とす。見るところ花にあらずといふことなし。思ふところ月にあらずといふことなし」(卯辰紀行)といひ、「片雲の風にさそはれて漂泊の思ひやまず」(奥の細道)といひ、更に「たよりなき風雲に身をせめ、花鳥に情を勞して」(幻住庵記)といふのを聞けば、正に西行の亞流であるが、自然と人間との二元の對立を認めず、ひたぶるに山野に跡を隱さうとするのでなく、人間生活の中に花月を包み、塵俗の世に山水を生かさうとするところ、まことに飛躍的な展開を遂げたもので、仕官懸命の地に没頭し得ず、佛籬祖室の扉に入りきることも出来なくて、専ら此の一筋にたながつたのではあるが、「高く悟りて俗に返り」、之を生涯のはかりこととなし得た境地は、仁山知水の文人型でないとは言ふまでもなく、篁裡清談の七賢型でもなければ、山林孤棲の隱逸型でもなかつた。

山水花鳥を人間生活に統合した芭蕉翁の一元的態度は、正しく日本文學の正系に生れ、神代かみよこの方の傳統を承けて之を近世的に展開せしめ、漢詩や老莊や佛典を他山の石として練磨を重ね、而も之を高踏的な貴族文學に導かないで、偏に俗談平話を正す庶民の文學に仕立てたもの

である。淺近の境界に在つて人と自然との高貴な美しさを味ふことを知らしめた點では、同じく庶民の文學として芭蕉翁の時代に在つた他の文學類と、全然その性格を異にする。

山水觀の型としては、尙ほ與謝蕪村等俳人の制作に現はれるものがあり、明治時代の新體詩人によつて創められた新しいものもあり、小説草枕に見えるやうな漢詩の境地に一轉歩を加へたものもあり、更に近代の山岳文學に現はれ、海洋文學に現はれるものがある。従つて視野に入るべき問題は尙ほ多いのであるが、與へられた紙面が盡きたので、一先づ筆を擱く。

(昭一五・九・一五)

本稿は雑誌「解釋と鑑賞」の需めに應じ其の課題によつて起草したものである。

斷章

一 童心讚頌

——幼年雜誌の爲に——

朗らかな春の朝、硝子戸に照る日ざしの中に、書齋に籠つて窓外の啼鳥を聴くのは、誠に心ものび／＼とするものである。枝に飛び交ふ小鳥の囀りは、直ちに嬉戲する兒童のさゝめきを思はしめる。裏庭に騒いでゐる小供達の聲は、程よい隔たりに緩和せられて、小鳥の囀りのやうに氣持よく響いて來る。このやうな聲や響は、いつも私の聯想を遠い過去に誘ふ。青年期、少年期、而して幼年期。あばらやのやうな片田舎の小學校に熊の子の群のやうに嬉戲してゐた兒童期。こんな時代の思出が映畫のフィルムそのまゝに展開せられる。

なつかしい幼年期よ。兒童期よ。萌え出る若草の野べを下に、青いろを霞に包んだ大空を上
に、渾身の精力を鳴き續ける雲雀にも似て、享け得たまゝの生を純粹に無雜に喜び謳ふ此の期
の生活は、一生の中の最も尊いものであつて、又最も過ぎ去り易い物であり、又最も永く持續

したいと希ふものである。

生れ得たまゝの姿は正にして純である。表裏を分たず、詐術を知らず、思考を回らすことなく、遠謀を策することもない。教へざるに正を愛し、説かざるに邪を惡み、善惡の別を理知的に考へることなくして、直ちに之を直觀する。此の旺盛な正義感、爛熳たる天真が、年と共に消磨して行くことは、何といふさびしさであらう。原始的な正純さが成人になるに従つて痲痺して行くのは、何としても堪へられぬ悲しさである。

兒童の世界には經驗と推理との生活は無くして、想像の生活があり、聯想の生活がある。環境に規定せられ經驗に囚はれてゐる成人の生活には、到底思ひ及ばない寛濶奔放の世界、自由清新の世界である。經驗に拘束せられず環境に頓着しない想像や聯想は、時には突飛であり、常規を逸する。然しながら同時に又奇抜にして人の意表に出で、清新にして目をそばだてしめ、奔放にして成人を驚倒せしめる。此の世界は幼年者独自の境地で、他の窺窬を許さない貴重なものである。

幼年の生活は又創作の生活である。奔放な想像力と自由な聯想力とは、その創作欲をそつて各般の創造をなさしめる。辻褃の合はないお話を作り、形を無視した土偶を造るのは、藝術の創作であつて、その辻褃の合はぬところ、形を無視したところに、特殊の味ひがあり、成人の思ひ寄り得ない独自の趣致がある。獨り藝術だけでなく、機械も作り言語も造り、各、その境界の中に創作性を發揮するのである。

此のやうな獨得の長所は、幼年期の寶として愛惜すべきものであるのみならず、一生の間持續してその生活を常に新鮮ならしめなければならぬものである。兒童期そのものは惜めども止まらぬものであるから、少年となり青年となり壯年となるのは、止むを得ない自然の推移であるが、人生の春を飾つた此の童心だけは、長へに失ひたくない大切な精華である。童心の存在は人の生活をして常に若からしめ、新しからしめ、活動的ならしめ、獨創的ならしめる。人爲の技巧をかなぐり棄てた自由寛濶な自然の中に、生活の原始を思はせる春の季節に、生れえたまゝの喜びを聲高く歌ひ出づる鳥の如き心もちは、一生を通じて抱懷しなければならぬ心の珠玉である。

成人の生活は完成を尙び洗練を愛する。しかも完成は終局であり、洗練は究極である。終局は停止であり、究極は固定である。長しへの童心は此の完成をして終局ならしめず、又停止ならしめない回春の靈藥である。此の洗練をして究極ならしめず、又固定ならしめない變若の仙

漿である。

久遠の童心よ。これを禮讚するは、吾等をお伽話の世界に封鎖することを喜ぶのではない。吾等をして長へに生きしめることを思ふのである。窓外の啼鳥を聴いて往時を追憶すると、此の尊い童心のいつとはなしに失はれつゝあるのを感じて、愛惜の念に堪へない。(昭六・三・三〇)

二 若葉は光る

若葉は光る。日が照つても光り、空が曇つても光る。雨にも光り、風にも光る。

新芽の出る頃は、樹々枝々の間を見透かすべき明るさがあつて、而もうちけふる空気の色で一切を押し包む渾沌さ模稜さが伴ふ。若葉はその渾沌模稜のもやをかなぐり捨て、明確な輪廓を露出して、而も満たされ行く内容の盛んな蓄積から来る重厚さを具へてゐる。

中夏の青葉と盛夏の茂りとは、豊満な陽氣を受けて、若葉の有つてゐた重厚さを、極度に推し進める。推し進めた結果は、けうとさを含んだ木下闇の暗さにまではひつて行く。若葉はその暗さに陥るのを避けて、薫風に淺緑を輝かす明快さを持續してゐる。

此の新芽と青葉との間にゐて、新芽の明るさを失はないで青葉の暗さに落ち込まないのが、

若葉の命である。——若葉は光る。

* * * * *

賀茂御祖神社かものみぶのの朝まだき、葵桂をかけたわたしたした樓門から、白砂を敷きならした庭上にかけて、若葉の森が色濃くかけを落してゐる。楠の葉のつや／＼としたのがそよ風に動く毎に、樓門の丹塗が鮮やかな目にしみるやうな色に變る。

行列が著いたらしく門外に馬の嘶きが聞える。暫くして緋の袍を著けた山城使が長い裾を引いて參入する。内藏使が同じ色の袍で、史生の淺緑二人を伴うて參入する。赤の舞人が蘇芳の陪従と、ズラリと並ぶ。最後に黒の袍の勅使が長い／＼裾を引いて庭上を行き、舞殿に上る。總べてが糺たすの森の静けさの中に行はれる。森の若葉は、此の緋や縹や赤や蘇芳の動いて行く物の背景となり、又電飾になつて、照したり浮き上らしめたりする。

陪従が琴を取り上げて一二歌をうたひ上げる、六人の舞人が舞殿に上る。鬨の緋の袍がパツと袖を広げられる、祖いだ大帷が縹色に翻る。色と色とが音無くして動く。舞殿の屋根には曇り空が垂れかゝつてゐる。然し舞殿を繞る若葉は、舞の袖と共に光り光るのである。

* * * * *

湖水が一旦廣くなつたが、此のあたりで又狭くなる。頸れるやうに兩岸が迫つて来る。琵琶の洞と棹とのつき目に當る所である。萬葉の歌人は「滋賀の大わだ」と詠じてゐるけれども、滋賀邊では、まだ「大わだ」の感じが出ない。太湖の感じは此頸れから先きの所にある。

堅田の浮御堂のほとりで、これから開けて行く湖水の大きさを、目路の限り眺めやると、始めて「淡海のうみ」の感が起る。水は白日を涵して遙かに／＼に光り續く。遠くの島山も半島も此の光に埋もれてゐる。近くの岸には蘆か葦か知らない草が、若葉をそろへて笹波の裡に立續いてゐた。勾當内侍の入水が美しい繪のやうに空想せられる。と、むせかへるやうな森の香を含んだ風が、後ろの比叡山からおろして来て、岸の樹本が一時に笑ふやうな輝きを見せた。同時に此の蘆の若葉が、裏をかへし、表を見せて、近くから遠くへ光つて行く。

* * * * *

有馬山は思つたよりも静かであつた。哀愁の思をそゝる絃歌の聞える湯の町でもなかつたし、放肆な雑音の跋扈する温泉地でもなかつた。湯に浸りながら流れ落ちる谷水のせゝらぎを聴くほどの閑かさはなかつたが、それでも若葉に取圍まれた山懷ろに來たのがうれしかつた。室の中まで迫る若葉の青い影、その影をすかして、遠くに見られる山の端の若葉の木末。

夜の宿は尙更静かであつた。ふと目を覺すと、後ろの山と思へるあたりに、ほど／＼ぎすが二聲ほど聞えた。枕もとの時計を見ると、二時半である。寝つきのよい私は、こんな夜中にほととぎすを聞く機会を今まで持たなかつた。電燈を消して、又そのあとを聞かうと心待ちにしたが、後はほど／＼とも鳴かない。晝に見たあの山の木葉の影に鳴き、飛び、鳴き、飛ぶ形を想像して見る。まばゆく輝く若葉だけが、闇の中にハッキリ見えて來るのである。

* * * * *

若葉は色と、匂ひと、光りと、音と、味とを思はせる。そしてすべてが明るい。然し此の明るい感覺は不思議にも皆奥行を有つてゐる。糺の森には歴史があり、堅田の水郷には空想があり、有馬の山路のには情緒がある。(昭三・六・六)

三水 涯

淀川といふ川の岸に、本當に自分の足で立つて見たのは、此の時が始めであつた。(そしてその後はいそそんな機會が來ない) 兩岸の堤には、若草が淺緑に生ひ廣がつてゐた。川原に下りると、葦がすい／＼と伸びて、同じ方向に向けた葉が、見るかぎり遠く廣く、風にそよいで

みた。その根をひた／＼と浸して、大河の水が、流れるともなく湛へてゐた。たつぷりした水量を、静かに／＼に運び動く川の姿。

こちらに天王山の山脚が、松の林に被はれたまゝ、ずつと裾を引いてゐる。あちらに男山の峰が、これも常盤木の黒ずんだ葉と、落葉樹の若緑とに包まれて、一つずつくりと突立つてゐる。二つの山の相迫つてゐる間を、やつと脱け出るやうにして、流れ出した淀川は、さも寛ろいだかのやうに、ゆつたりとその流勢を収めて、淀みながら、低徊しながら、廣々とした平野をわけて行くのである。

それは水無瀬宮から橋本へ渡る時のことであつた。朝、大阪を立つて山崎の停車場に下りる。關戸の址、離宮八幡、妙喜庵、櫻井驛址等、歌枕をたづね廻つて、水無瀬宮に詣でる。水無瀬川は後鳥羽天皇の御製によつて幻想してゐたほど幽邃に感じなかつたし、「山もと霞む」と詠ぜられるほどの山も見られなかつたが、若葉の森にこんもりと圍まれて、人のけはひの少ない一境域をなしてゐるのがうれしかつた。五月の陽のちら／＼洩れる森影に、私共だけが參詣してゐる清楚な離宮址が、安らかに、静やかに存在してゐた。至寶として藏せられる後鳥羽天皇の尊像及び御手形の押された繪旨を拜して、さて宮を辭し森を出離れると、はる／＼と川の堤が見わたされる。うね／＼と堰道を行く私共一行の日傘が、ふりそゞぐやうな明るい光の中を、白う青う動いてゐる。そして堤を超えて流れに臨んだのである。

草の間に腰をおろすと、葦だか荻だか、からだの半分位は隠れる。對岸には橋本の人家が見える。「おうい」と呼んで見る。渡し舟を呼ぶ心もちである。無論聞えはしない。いつまでも待つてゐる。あたりは全く静かである。眞黒な不恰好な小さな水鳥が、つうい／＼と水の上を滑つてゐるのが遠くに見える。直ぐ潜つた。水の輪がゆるく廣がつて行く。此の茫漠としたましまりのない場面は、風景としては全く名所圖會の型を脱却してゐる。山水畫幅の構圖にも無いものである。道の記などにも或は書き捨ててあり、或はかき落してあるところである。こんな地域は曾て見たことがない。

惟喬の親王は、その若々しい然し感傷的な眼を伏せて、此の流れをじつと見つめておいでになつたのは、もう一千年の昔である。渚院なすののゐんのあたりと思はれる下流の對岸を見ると、草いきれにもえ上る靄の中にうづもれてゐる。在原業平が御供してこゝから船を出してあの靄の中へ漕ぎ下つたに相違ない。いや、あの靄の中から紀貫之が疲れきつた旅の身を、小さな苦舟に載せて引かれて上つて來たのである。人數一人足りない寂しさと、京へ歸る喜びと、地方人の情深

さに對する感謝と、都人の輕薄さに對する憎惡との複雑なこんがらかつた感情を懷いて、彼は今さりげない和歌を認めてゐるのである。さうだ、「橋本の君」が異國の水郷に聞かれるやうなゴンドラの歌を、潯陽の江の上を流れたやうな琵琶の音を、溶々とみなぎる水に漂はせたのはやはりこの霧の中からである。

一千年の間、どのくらゐ多くの文學者、軍人、有司、高僧、乃至落人、科人が此の流を上り下りしたことであらう。「淀のわたりのまだ夜ふかきに」郭公を聞いたのは、いづこの事であつたか知らない、此の青葉の影の深さに對すると、夜をこめて舟をやる古へ人の思ひを汲むことが出来る。

元祿七年十月十二日、大阪の花屋仁左衛門の家から、俳人芭蕉の遺骸を納めた長櫃を運び出して、大津の義仲寺へ送つた時も、此の川の夜船であつた。其角、去來、丈草等、十一人の俳弟が「長櫃の前後左右を取巻いて」伏見へと此の川を上つた。兩岸の草は狐色に枯れて、今の此の若縁には似てもつかないのであるが、流れ去り流れ來る水の姿は變らなかつた。丁度此處の渡りにさしかゝつた時に「夜もしらゝと明けはなれ」て、人々は顔を見合せた。この間まで翁を中に立てて一つに集まつてゐた各の心が、今何となき不安に、かすかな動搖を感じてゐるこ

とが、おのづと皆の様子にうかゞはれるのであつた。

渡舟はやつと來た。一行の半分を乗せて先づ渡してやる。舟は悠々と岸を離れる。徐かに動いて行く。日傘と袴との交錯した一團が段々小さくなつて、はては一つの塊りに融け入つて行く。取残された半分は、まだ悠々と葦原の中に腰をおろしてゐる。からだを草に埋めてゐた私は、唄でもうたひたいやうな氣持になつて、時の移ることを忘れてゐたのである。

向岸に著いた一塊が、ばら／＼と解ぐれて、堤の上に散らばるのが、小さく映畫の一部のやうに見える。誰かゞ聲を立ててこちらを招いてゐる。私共はこれから石清水の方に行くはずであつた。(大正・五・一三)

四 光に背いた富士

富士の山を文學藝術に取扱ひ始めてから、一千年の歳月を経て、今では三國一の名山だなどと言つても、もう陳腐に聞えるやうになつた。繪畫や彫刻の方面はさて置いて、文學の方面だけに就いて見ても、萬葉集以前の古傳説では、常陸風土記に見えるやうに、必ずしも讚美謳歌せられてばかりはゐないのであつたが、山部赤人が「神さびて高く尊き」この山を真正面からは

やし立てて以来、都良香の文集にも、在原業平の東下りにも、西行法師の廻國修行にも、必ず附いてまはつて、美しいもの、崇高なものに相場がきめられてしまつた。そして此の山を月並にしてつた。月並になつて了ふと、新時代に勃興した山岳禮讚熱の恩恵をも蒙らず、新しい詩や文にも顧みられることが少くなつた。

然しながら富士山の壯美は、今日と雖も依然として存在するので、自然の姿は古往今來に變りはないのである。之を見直し味はひ直すといふ眼力の新鮮さがあるなら、更に／＼新しい美しさを發見して、更に／＼驚異を感じるに相違ない。

私は曾て冬の拂曉に於ける富士を見たことがある。淡紅に光る雪の山と、曙の空と、その間を限る細い／＼線の美しさ。左右兩極の遠い／＼地平線の上から、斜に上の方を向いて伸びた二つの線が、相會はうとして容易に相合はず、高く／＼走つて相近づきながらも、容易に寄付かず、遂に思ひ切つて直角に折れて來て、兩方から手を伸ばし、たうとう一思ひに結び合はさつた線の細さと強さ。私は歌にも詩にも物語にも見たことの無い「線の富士」を發見した。

又曾て甲斐の方面の熔岩原に立つて裏富士を見たことがある。吉田から河口湖の船津へ行く途中、劍丸尾といふ地點を横ぎつた時である。はてしない斜面の曠野、處々に黒々と立つてゐる

熔岩塊、生ひ亂れた秋草の中にまばらに咲く草花、熔岩流の限りなく流れ下つて行つた道筋の、遙に／＼はつきりと見渡される山裾、又その流のまつしぐらに落ち込んだ跡のまざ／＼と残つてゐる湖岸、湖水の沖にも邊にも突兀と立つてゐる巨大な熔岩塊。總べてが灰色で、どす黒く、赤茶けて、見る私の心も暗かつた。荒涼とした曠野の真中に、「光に背いた裏富士」の黒い影を見て、曾て經驗したことの無い寂しさを感じた。河口湖に行つたら船津から船に乗るのだと教へられて、その岸に立つては見たが、水の色の悲しさにおびえて、船を出し得なかつたのである。私はこゝでも、文學にも繪畫にも見たことの無い「暗い富士」を發見した。

かうして觀直し味はひ直すと、富士は無限の新しみを有つてゐる。古典的な富士は、長へに新しい面目を以て藝術に取扱はれ得ることが感知せられる。自然はいつになつても陳腐にならないことが、今更ながら切實に思ひ寄せられる。ちやうど世に優れた古典の名篇が、長へに新しい鑑賞に生きてゐるやうに、富士はいつの世にも生命を有する古典の傑作である。

此の心が私をして更に未だ見ぬ方面の富士の姿を細想せしめる。詩歌に謳つてゐない、繪畫にも描いてゐない富士を思はしめる。河口湖よりは更に裏の方へ、富士の暗さを探つて見たいと思ふ。それは世に五湖巡りと稱してゐるやうな湖上の美景を眺める意味ではない。陽に背い

たあら野、山と山との間の茅原、熔岩に埋め残された林樹、「せの海」といはれた昔から淀んでゐる水の魔のやうな色を探る意味である。(昭五・五・三〇)

五淵 黙

海樓の夕暮は森としてゐた。縁側の藤椅子から見下すと、紺碧を湛へた入江の潮は、怖ろしいほど静謐であつた。入江を圍んで切立つてゐる岩壁の上の緑濃い茂りを映して、言ひ知れぬ暗さをさへ感ぜしめた。

大國主神が、天の羅摩船かまのみふねに乗り鷲皮ひわしのかはを著て波の穂をこなたに寄り來る不思議な神を發見されたのは、美保崎に御在した時であつた。八重事代主神が、國譲りの大問題の留守中に起つてゐるのも知らず、鳥の遊び漁りしに行つていらしたのは、やはり美保崎であつた。美保が關はかうした神話を秘め、傳説を潜めてゐるにふさはしい幽關の境である。

入江を出て岬を廻れば、日本海の浩蕩は果てしもなく水平線の限りを擴がつてゐよう。其のたよる所の無い孤愁から逃れて、母の懷に飛び込むやうな氣持ちで、船を入れるのが此の入江である。遙海の波濤が地軸を動かして荒れ狂ふ時、帆を落し、櫓を倒し、死力を盡して逃げ込

んで來るのも亦此の入江であつた。美保が關の入江は、古來どれ程多くの悲話哀話を秘めてゐることであらう。岸を繞る漁家、漁家に續く旗亭、旗亭に隣る旅舎、これらには、船著の町に有り勝の紅燈綠酒の趣は無く、絃歌湧くが如くの様子もない。海樓の夕暮は森としてゐた。

此の幽關の一境をかくまふやうに立連つてゐる山の一角に、航海者の目標として、幾百年を朔風に暴露して來た巨大な松がある。封建の代を思はせる傳説と、之にからませて作られた俚謠とを有つ名高い「關の五本松」である。その「一本切りや四本」と謠はれる地方色のある旋律を、遂に聞くことができなかつたが、恐らく哀切の音で、聞き終るに忍びないものであるにちがひない。

* * * * *

美保關の朝は晴れてゐた。旅宿の二階から南の方、海を隔てて遠く中國の山波が眺められた。弓なりに海を限つてゐる弓の濱の渚を、遠くへくと見送ると、その果てに左右に伸びた山波の群を抜いて、一峰高く朝靄の中に頭を擧げてゐる大きな山があつた。頂の赤茶けた山肌が、此の地方に類の無い高山性の景觀を見せてゐる。伯耆の大山である。山陰に入つて五日目で、やつと晴れた空と此の山の威容とを見た。青黒く隈どられて見える所は密林帯であらう。

あの奥に僧坊が有るといふ。そこに一夜を明かしたいと思ひ附く。

* * * * *

裾野はすばらしく廣大であつた。熔岩流の跡のまざ／＼と見られる中に、林があり、川があり、水田があり、村落がある。はてしない曠野と言ひたい火山灰の緩斜面を、夏草踏みしだいて自動車を進めるのである。行き行いて、急勾配の坂路が目の前に迫ると見た時、自動車がバツタリと止まつた。ふりかへると、いつの間にか高い所に來たものだ。弓の濱の弓なりが遠く低く、雲か霞かの中に淡らいで、美保關あたりは水か天かの中に没し去つてゐる。

路を右に外れて林を過り、川原を横ぎつて又林に入つた。すばらしい濶葉樹の密林だ。而もブナの純林である。折からの曇り天は森の下路を一層暗く感ぜしめた。志す僧坊はその森の奥に草に埋もれてゐた。岩丈な丸木のまゝの材で組立てて、重さうな草葺の屋根を載せてあつた。軒には巨大な支へ棒がかつてあつた。寛の水に顔を洗つて一室に休息してゐると、緑の蔭は迫るやうに室内まで流れ込み、庭前の密林は果てしなく深々と擴がるのであつた。

遠くに鳥の聲がした、鶯のやうである。盛に鳴く。と又杜鵑が鳴き出した。近く姿の見えさうな樹にも鳴く。遠近交錯で、二つの聲が競ふやうに鳴きしきる。その中にいつか新しい聲が

交つて來た。聞き知らぬ聲である。やさしみは鶯に似てそれよりも野趣があり、旋律は杜鵑に似てそれよりは艶があり、愛嬌があり、餘韻がある。近い梢でも鳴くので、軒のはづれから見上げるが、深い茂りは飛び交ふ形すらも隠して洩さない。茶を飲み、茶を飲む間、此の知る鳥知らぬ鳥の奇しき交響が暫く續いた。

夢心地に聞き耽つてゐると、若い坊さんの庭先を通り過ぎるのがチラと見えた。あれは何といふ鳥ですかと尋ねると、「慈悲心鳥ですよ」と事もなげに答へて行く。——これが慈悲心鳥なのだ。曾て高野山の奥院に佛法僧を聞かうとして、眞夜中の一時を森の中に佇みながら、遂に期待通り聞き得なかつたことがあつたが、これは又何等豫期しないのに、思ひがけない微妙の法音を聞き得たのであつた。

いつか鳥は鳴き止んだ。杜鵑も聞えない。鶯も遠のいてしまつた。僧院の晝は森閑として深い淵の底のやうな黙寂の中に在る。(昭九・九・三)

六音 四題

櫓 聲

どこともなく聞こえて来る櫓の音だ。絹を張つたやうな一面の白い光の底から、唯一つ湧き上つて来る櫓の音であつた。夢心地に埋もれてゐた銀ねずみの靄の中に、フト目覺めて來た意識をゆすぶつて、自分が今どこに居るかを顧みしめる聲であつた。

見渡す限り廣く光る靄である。其の中の所々に浮き漂うてゐる淡墨の影がある。上には燦し銀の和かい光を視野一杯に漲らせてゐる月がある。そして此の厚い白い靄の底深く、静まりかへつた海が潜んでゐるのである。そして其れから生ひ出たやうな大小の島々が、遠く近く隠れてゐるのである。

春の霞のやうに濃潤でなく、秋の霧の如く冷淵ではない。淡々と爽やかな中に温かくやはらかな趣を含んでゐるのが此の夏の霞である。然しながら私はこれほど美しい夏霞を見たことはこれまでに無かつた。あらゆる物象を包容して一つ光に被つてしまふ美しさである。海も島も松も人も、一様に夢の裡に誘ひ込んで了はねば止まぬ美しさである。此の夢の裡の人を呼び醒ましてくれたのが、今、霞の底から聞えて来る櫓聲である。

松島の月、月夜の松島、何といふ有りふれた題目であらう。名所といふものに幻像を失つてゐる私には、こんな場面に魅力を感じるはずは無かつた。奥細道の旅に出た芭蕉翁は、「松島の

月先づ心にかゝりて」草庵の始末もそこ／＼に江戸を立つたと書いてゐるけれども、其の感激を再びすることの出来る今ではなかつた。然るに今夜の月は何といふ新鮮な感觸で人に迫るのであらう。私は灣頭の松の下に佇み盡して、「晝の眺また改む」と夜の松島を見直したのである。

櫓聲は靄の底の世界の消息を洩すやうに、銀鼠の幕の上にもり上つて来る。(昭八・九・二)

杵 聲

嚴島の宿に著いたのは、夜も大分遅かつた。もう寝かしてくれさへすれば善いのであつたが、女中が湯殿に案内して、湯の加減を見てくれたりしたから、先づ煤ほこりによこれたからだをお湯に沈めた。そして此の旅に歩いた所を思ひ返して見た、吉備津のお釜さん。あの阿曾女の顔は忘れられぬ。お釜の音はまだ耳についてゐる。松の屋の巨松。鶏頭樹園かてのそのの一室で火鉢を圍んで語つたあの神職の人の物語も善かつた。志度の鳩溪生家。あの「先祖が／＼」と言つて、源内の事を話してくれた平賀氏もなつかしい。琴平の夜。小商人らしい人の教へてくれたもの静かな質素な宿も氣に入つた。

もう十二時に近からう。時刻も遅いが、あたりがしんと静まりかへつてゐる。それも無理はない。今日は暮の二十八日だもの。お湯を出て二階に取つてくれた室に歸り、行火で温めてあ

つた寢床にもぐりこむと、すぐうと／＼となつた。

どことなく音が聞こえて来た。同じやうに間をおいてトン／＼と響く音である。夢の國にある家の戸ほそをうつゝの神様が敲くやうな音である。遠くかすかであつたのが段々近くハツキリ聞こえて来たと思ふと目が覺めた。とろりとしたばかりだと思つたが、時計を見るともう夜明けになつてゐる。耳を澄ましてゐると、それは餅搗く杵の音とわかつた。

年の暮だ。行く年を送る聲だ。年の瀬の涉り難さを朗らかに歌ひ消すやうな聲である。遊覽地とも思はれぬもの靜かな一夜を、常は雜踏する客舎に宿つて、會々こんな太平な物音を寢床の中にして聞いてゐるのは、容易に得難いほほゑましい場面である。(大三・一二・二八)

濤 聲

明石大門（明石と）は今急流のやうな潮さみである。昔柿本人麻呂が故郷の山の見えなくなるのを惜み、又その見えて来るのを喜んだ瀬戸、平家の公達が一の谷の城廓から月の夜をあくがれ渡つた瀬戸が即ちこれである。そして淡路島山は大河の向ふ岸でもあるやうに手近く横はつてゐるのである。一夜の宿をかりた須磨の友人の家を立つて、村雨堂の一つ松、敦盛塚の五輪、此のあたりの舊跡を巡歴して、今此の瀬戸に臨んで見ると、やはり之を押渡つて見たくなつた。

「繪島の磯」。歌名所としても感興をそゝる名ではあるが、軍書のそれが一層今の私を引き付ける。戦塵の唯中にありながら、月には興じないでゐられなかつた人々の雅懷をなつかしむのである。今宵は月がある。せひとも繪島に渡つて磯の月を見なければならぬ。

海島の一角に在る旅舎は、ガランとして人げが無かつた。荒磯の上の樓は、風雲に浮ぶ仙境の一つ家のやうに世離れてゐた。樓下の岩礁にうち寄せる波は、投網を擲げたやうな形で岸に走せ上る。その度毎にザアといふ音が地響きと共に湧き起る。

寂しい聲である。然しながら迫力の腸にしみ入る聲である。月下の海は薄黒く廣がつて、波頭だけが無氣味に光る。それが岩床を馳せ上る毎に、白い覆輪をバツと廣げるのである。じつとそれを見下ろしてゐると、何か生きもののやうに思へて、深い底から動いて来た青白い靈を想像する。そしてその度毎に起るザアといふ音は、盡きぬ恨を訴へる魂の聲とも聞かれる。「波こゝもとにたちくる心地」して、惱ましさに堪へなかつた光君の憂鬱をも同感するが、むしろ風雅と殺伐とを一身に相剋させてゐた平家の哀愁が切實に感ぜられるのである。(大二・七・三一)

鳥 聲

砂丘は長く尾を引いて千代川にまでなだれ落ちる。水量の豊富な川尻の淀みに、丈の高い葭

が厚く長く生えてゐる。夏の陽の強い光が大きな葉の厚みを透けて青い影を落してゐるのである。

私達は今ふり注ぐ日光を日傘に受けて、川沿の草深い細道を行く。川下に突き出た砂嘴の向うに日本海の浩蕩を見ながら、いつまでも一筋道を行く。ふと川淀の葭の茂みに聞き慣れぬ鳥の聲がきかれた。キリキリと鋭く響く聲である。茂みの奥を透かして見ても、それらしい形もないが、近く遠く幾度も鳴きたてるのである。

直ぐ後に續いてゐたFさんは「あれ葭切ですか」と聞く。私はまだ葭切を知らない。「さうらしいね」と言つて見ると、益々さうらしくなる。YさんもSさんも知らなかつたが、結局皆で「葭切といふことにしときませうよ」ときめた。(昭一〇・七・一四)

七 山 燒

山は今火に包まれてゐる。麓から焼き上げた火は、草の斜面を這ふやうに、上へ上へと燃え進んで行く。バツと光り、赤く廣がり、黒く渦巻いて迅速に山肌を焦し盡すのである。常盤木の森を裾に踏まへて裸形の山體を露出したやうな草山は、今猛焰の中は在る。

と見る中に、山の背後が赤く光つて來た。向ふの麓に火が廻つたのである。頂上目かけて刻々に焼け上つて來る火は、山の後景をもつての凄いに染めなすのである。もう火先きが山の肩のし上つたと、見る見る、正面を燃え登つた大部隊の横列と衝突して、激しい争闘が頂上で行はれ、遂に一道の活きた火となつて洞然と燃え昇るのである。

風の無い靄のたちこめた日であつた。若草山を被うた靄は火の光を映じて、夜空を限る大きな銀幕と輝いた。濛々と渦巻き上る白烟黒烟が、靡き、廣がり、むくれあがつて高く伸びて行く。星のない暗い空を焦して山焼きの火は燃えさかつてゐるのである。

若草山を焼く。此の行事は奈良の年中行事中の最も豪快なものである。近く之を見て凄まじい爆音を聞く者は、身内からこみ上げるやうな昂奮を感じる。一千年この方、代々の國人を昂奮せしめて來たその同じ昂奮である。閃く焰の中に、渦巻く煙の中に、上代人の昂奮が生き々と脈うつて今見る人に迫る。又之を遠く眺めて赤々とした山火が音もなく燃え廣がるのを見る者は、いひ知れぬ哀愁に深く深く引込まれて行く。それは奈良朝人をも平安朝人をも同様に壓迫した故知らぬ哀愁である。豪快な光景の中に奥深く潜み、漲るやうな昂奮の中に忍びやかに流れ來る悲しみである。

書齋の縁側に椅子を移して、いつまでも此の火に見入つてみると、曾て畝傍山の麓にあつた友人の寓居に旅寝して、始めて此の山焼の火を遠く眺めた記憶が喚起される。其の悲しく寂しく見えた火の印象が生き々と蘇つて来るのである。(昭一・二・一六)

八 雨奇餘物語

青根の湯の湯槽に唯一人つかつてゐた。立籠めた湯氣にぼうつと潤んだ電燈が、殊更あたりの空気を和らかにする。人音は遠くよその世界からのやうに、たまさかに聞えるだけで、硝子戸の窓の外は、今しとくと降る雨の音である。

仙臺で語り合つた多くの友と別れて、全く一人ぼつちの夕べである。往く思はず来る思はぬ唯今のときは、雨の夜にふさはしい情調を帯びる。これほどなごやかな氣持で雨の音を聞いたことは、未だ曾て無かつた。遙々みちのくの旅に出て、山奥の山の上まで分け上つて来て、さて雨に閉ぢられ、霧に籠められてゐるのに、聊かの不満をも感じない唯今の安らかさ。湯を出ると、女中が電話がかゝつたから郵便局へおいで下さいと言つて来た。番傘をさして露の中を局へ行く。聞くと仙臺の友人からである。此の山奥の一夜を名残りにみちのくを去る

私に別れを告げようといふ友の芳心である。「太平洋が見えましたか。」いや、雨と霧です。「お困りでせう。」いや、落附いた雨、山の湯にふさはしい雨です。有難う。(昭八・九・三)

槍ヶ嶽の頂上から降りて来た日である。槍澤から梓川に沿つて、穂高嶽の裾をぐるりと廻つて上河内の温泉へ急いだ。晴れた高い空にぼつと雲が浮いたと見ると、忽ち雨が落ちて来た。さあつと落ちる雨である。太い白い光つた緋模様を織つて落ちる雨である。梓川沿の深い林に音を立てて落ちる此の雨は、およそ穂高山系のいかつい山岳に似もつかぬ美しい雨である。林徑の苔路を辿り行く原始的な一人旅にはふさはしからぬ美しい雨である。(大一二・八・一七)

櫻んぼの艶々した赤玉が鈴なりについてゐる枝を、汽車の窓まで持つて来てくれた友の心づくしを、そのまゝ定山溪の温泉まで運んで来た。溪流に沿うてこんもりと茂つた青葉の中に、森閑と立つてゐる倶楽部の建物を、これも札幌の友の厚意で今宵の宿とした。溪の向うに建並ぶ旅館のざわめきを遠くに聞き流し、此の翠緑の山房を獨占して樓上の一室に北海の木の實を味はふのである。

朝から曇つてみた空は、とうとう細い雨になつた。深林の葉といふ葉が、盡く音を立てる。細い小さな音が集まつて楽音のやうに聞えて来る。蝦夷の昔から奏で來つた原始的な楽音である。定山坊が庵を結んだそのかみからの雨聲である。机に凭れてじつと此の聲に聞き入る。

こゝに案内をしてくれた二人の友と、心靜かに昔今の物語をした。風雅な話ではなく浮世の話である。一昔前のうきよものがたりである。旅に出てから此の夜ほど落ち着いた氣持になつたことはないので、身近いうきよ物語も、遠い古代の物語を読むやうな心持ちで聞くことが出來た。

雨の夜はもの、が、た、り、に、ふ、さ、は、し、い、も、の、で、は、あ、る、が、北邊の林野に分け入つて、このやうな一夕を持たうとはかけても思ひ及ばなかつたのである。(昭一二・七・一五)

九 志 賀 の 都

近江の海は初夏の陽光にキラキラと漣を立ててゐた。宇佐山から東へ程善い傾斜をなして岸に落ち下つてゐる一帯の田畑は、隈無い明るさの中に生き生きと青い呼吸をしてゐた。顔を撫でるやうにやんわりと吹く薫風のため中に、電車から下り立つた我々は、籬落の間を抜けて白

白と通る新開の路線に出た。そこは近江神宮の建設地域で、今し山を削り社殿を營み、苑樹を植ゑ參道を開き、山腹の斜面六萬坪の地に工事を急いでゐるのであつた。

我が國家の體制を對外意識の下に整備あらせられた天智天皇は、「いかさまにおもほしめせか」(柿本人麿の歌詞による)帝都を此の地に御選びになつた。立法に行政にはた國防に、進取の一途を邁往せられた天皇の御遺跡は、今我等の眼前に、躍進の途上一億一心の努力を爲してゐる國土の上に、爽かな青嵐の中に展がつてゐる。

神宮の敷地前に立つて北を望むと、そこにこんもりと繁つた竹藪を圍む一つの部落が見える。私共は其の一角に在る小學校をたづねて、近時都址調査の際此の部落から出土した夥しい發掘品を見た。籠目の瓦、當紋の蓮瓣、彌生式の土器、すべて飛鳥地方の出土品を見る思ひのするものの中に、黄緑の釉の色美しい古陶の破片が目立つて見えた。これがその道の人々に喧傳せられる唐三彩である。

都址は滋賀里、南滋賀、錦織一帯の地に亙つてゐるであらうが、今此の部落で發掘せられたのは、伽藍の遺構である。これが大津宮の跡に建立せられた梵釋寺の遺構であるか否かは、今輕々しく決定せられないが、此の發掘品が示す通り、奈良時代以前から在つたであらう古建造

物の遺跡である。其の以後の様式を具へるものの錯交して出土するのは、一度壊廢の後に第二の建造物の立てられたことを示唆する。雄偉な鬼瓦、巨大な葺瓦、徑八寸に上る瓦當、奈良時代以前の迫力を感じしめるものが少くない。

遺構は民家の敷地から道路を貫いて竹藪に互り、寺院の境内に入り、畑地に及ぶ。整然とした薬師寺型の堂塔を思はしめる。塔の心礎と推定せられる偉大な礎石もあり、講堂・食堂の址と考へられる礎石列もある。東西七十五尺南北六十尺の金堂基壇も掘廻らされて、平瓦の堆積が井然と竹藪の下に線を劃してゐる。

林樹を離れて明るい畑地に出ると、一列の礎石が並んで、堂塔を囲む廻廊を思はしめるのであるが、そこに累々と積み捨ててある瓦片の山があつた。發掘の土中に散在してゐたものの集積である。我等はその上に腰して暫く往古の姿を細想した。皇居六年の御跡はその遺物を見る由もないが、此の伽藍が無縁の地に建造せられたものでないとするれば、こゝに拾ふ一片の瓦石にも「さゝ波の大津宮」の幻覺を起し得るのである。

緩い傾斜をなして落ち廣がる青田菜畑の末に、「志賀の大わた」が昔ながらによどんでゐる。すめろぎの御好きであつた水鳥は、今も白い羽裏を日に輝かして飛んでゐる。高市黒人が妻を

帶同した旅姿で、「かくゆゑに見じといふものを」と湖畔に哀泣する場面がふと幻想されたが、その薄れて行く跡に大寫しに現はれるのは、やはり柿本人麿のうつむき加減な顔附であつた。夏草の繁みを踏んで強烈な光の中に立ちながら、「春草の茂く生ひたる霞たつ春日のきれ」そのかみの大宮どころ、感傷的な深い眼附を石膏の叢に注ぐ人麿が面影に立つのである。

黒人や人麿は其の傳記すらもわからないが、その歌は永遠に傳はつて人の胸を打つ。古都は荒廢しても天皇の偉業はとこしへに國史の上に光る。續日本紀に見える御歴代の宣命を拜すると、天智天皇の「天地と共に長く、日月と共に遠く改るまじき常の典と立てたまへる」法令に依つて國政を執らうと仰せられるのを屢々承るのであるが、皇居たること六年間に過ぎぬ大津の宮も、あの近江令があつて永遠に景仰せられるのである。宮室あとかたもなく、後に建造せられた伽藍さへ亡びてしまつた此の遺址も、人麿・黒人等の和歌が有つて、今も尙ほ綿々と回顧の情をそゝるのである。

湖畔にふりそゞぐ日光の明るさに係らず、小溝沿ひの草道を滋賀驛の方へ歩いた私等の氣持はかなり重くるしいものであつた。古を戀ふらむ鳩どりの息づきのやうなものを感じつゝ。

國文學群像

—終—

日本標準規格A列五號型
日本出版文化協會員番號(一)二五三三
二〇五三三

昭和十六年十一月二十日印刷
昭和十六年十一月三十日發行

著者 岩城準太郎

發行者 東京修文館
株式會社
代表者 鈴木金之助

發行者 大阪修文館
株式會社
代表者 鈴木常松

發行者 交進社印刷所
代表者 余部博章

印刷者 交進社印刷所
代表者 余部博章

發行所

東京市神田區神保町一丁目二十五番地
振替東京二六四四番
大阪市東區博勞町五丁目五十六番地
振替大阪四七一番

配給元 日本出版配給株式會社
東京市神田區淡路町二丁目九番地



(略歴)
(出生) 明治十一年富山縣に生る。
(學歷) 明治三十五年東京帝大文科國文學科卒業。(職業) 奈良女子高等師範學校教授。
(著書) 明治文學史(明治三十九年) 明治大正の國文學(大正十四年) 表現と鑑賞(大正十三年) 新講日本文學史(大正十五年) 國文學の語相(昭和三年) 新修日本文學史(昭和十三年)

國文學群像

著作

權

所有

定價參圓五拾錢

修文館新刊書

國語文學叢書

石黒 修著 (文部省推薦)

日本語の問題 B六判二七二頁
定價 二・三〇

菊澤季生著

國語と國民性 B六判三一八頁
定價 二・五〇

飛田 隆著

言語形象學 B六判二六〇頁
定價 二・一〇

大西雅雄著

朗讀學 B六判三〇〇頁
定價 二・五〇

木枝増一著

語法の論理 B六判三一八頁
定價 二・五〇

井本農一著

日本文學史攷 B六判三〇〇頁
定價 二・五〇

森本治吉著

萬葉集の藝術性 A五判五六〇頁
定價 五・〇〇

志田義秀著 (文部省教學局選奨)

奥の細道・芭蕉・蕪村 A五判三七〇頁
定價 三・二〇

吉田精一著

明治大正文學史 A五判四一〇頁
定價 三・五〇

吉田精一編

展望・現代日本文學 B六判四三〇頁
定價 二・五〇

石黒 修著

日本語の世界化 B六判三三〇頁
定價 二・五〇

908
130

終